

# 思いやりと学力は比例する

組織局長 岡本 美穂

## 『自ら学ぶ子ども』

なんて急には出てこない？

「5年の頃、理科がすごく苦手だったけど、今のところはしっかりと勉強できているので、これを6年の終わりまで続けてそれを保っていききたいです。今十七条を作っているけど、それを飾りにするのはダメだから、それを守って、いづれかはそんな作らなくてもルールとかを守れるようにしていきたいです。自分からやることを見つけて、それをすすんでやっていきたいです。」

これは最近子どもが書いてきた日記です。

飾りにせず・・・

自分からやることを見つけて・・・

すすんでやっていきたい・・・

このような言葉を子どもが急に言い出した、ということはありません。常に

授業などで、私が言ったことを子どもたちは心にとめていて、それを自分の言葉にして、子どもが自ら考え行っているものです。

つまり、教師が意図的にきっちり「自立」ということを目標にしているのかどうかで、日々の教師の言動が変わってくるということです。また、子どもの日記の中に十七条を作るとありましたが、これも意図的にさせています。これは聖徳太子の十七条の憲法を学習した際、

教師「これ今でも通用する？」

児童「あつ、いける。」

教師「学校の十七条もありですね。」

児童「あつ。クラスでもいけそう。」

教師「おつ、作ってみてよ。」

と言って、社会が好きな子ども中心に進めてもらうように話をしました。全員で考えて作る、というのもよく聞きますが、あえ

て平等にさせずに一部の子どもにチャンスを与える。そしてそこからの広がり求めて、どんどん意欲的にやっていくという方法を使っています。

自立した集団、自治的な学級づくりというのには、「アクティブラーニング」という言葉が出て以来、今まで以上に意識される機会が増えたように思います。そこで自治的な集団についてや、最近出された本を読んでみると、ある法則があることに気が付きました。それは、授業について書かれたものより、学級会や係り活動など授業以外の時間でどう育てるのか、について書かれたものが圧倒的に多いということです。一見、キラキラとした、いきいきとした子どもの様子が描かれているので、まねしたくなるのですが、時間の捻出で諦めてしまうことが多いものです。

以前テレビのクイズ番組などで、どれだけ無知なのかを面白がる番組が高視聴率をとっていたことがあります。「おバカキャラ」から「おバカ」であるのを好まれた時代です。「おバカ」でも可愛かったり、おもしろかったらいい、という価値観を知らず

知らずのうちに定着されているようで不愉快でした。人間というの、は賢くなるために必ず努力が必要です。そんな時に、どれだけ馬鹿でいられるのかを競うなんてひどい話だと思いました。しかし、今求められる価値観はそういうものが多いのではないのでしょうか。

つまり極端に言えば、馬鹿でもコミュニケーション力があればいい、という時代に来ているのではないかと不安に思います。勉強できなくても、漢字が読めなくてもコミュニケーション力があればなんとかできる、そういう価値観を小学校から教育として行っているような実践が多いことに危機感を抱いています。

だからこそ、学力がどれだけついたのか？常に意識しながら「自立」という心の面を意識していきたいと考えています。

## 思いやりと学力は比例する

教師は勉強ができなくて大変だったという経験よりも、どちらかと言えば人との付き合い合いで苦労した、または学校でそういう仲間の大切さを実感した、という経験を持

っている人が多いように思います。だからこそ、子どもたちの人間関係を重視するという人の方が多いように思います。それが学級づくりに入れるということですよ。

私も「学級づくり」にとことん力を費やした経験を持っていますので、よくわかりません。しかし、だからと言って子どもが自立した言動を行ったかと聞かれると、はいとは言えません。担任が変わるとまったく違う姿になった子どもがいたからです。

やはり授業で学力をつけながら目指すほうが将来的に凛々しい子どもになるということが見えてきました。

**「学力をつけてやれば子どもたちはキラキラして、落ち着いて授業に参加するようになる」**

前回の久保先生の原稿に書かれた言葉に納得しました。

「成果がでなければ子どもは落ち着いて、授業を受けたり、自主的に勉強を始めるたりしない。だから先生方はいろいろな常識というものに囚われないで、ただひたすらにどうすれば学力がつけられるのか。その目的に直結した道を探

ってほしいのです。そしてそれを発表し合います。これが学力研であってほしいのです。」

「自ら学んでいる」と感じている子どもはキラキラしています。例えば、体育になると張り切っている子どもが、国語になると黙ってつまらなさそうにしていることはありませんか。それは、なぜでしょうか。子どもによっても理由はいろいろあるでしょうが、一番は「面白くない」ということです。毎日同じ教材で、出会ったこともない人の考えを読み取る作業をしているのは新鮮さも何もありません。子どもは「はまりやすく、あきやすい」ものです。例えば国語の授業一つでも、子どもが、筆者の説明について自ら問いをもち、言葉に何度も立ち返りながら、友だちと一緒にその意味を追究するような授業を目指していきたいものです。最初は気付かなかつたけれど、繰り返し文章を読んだり、仲間と話し合ったりしていくことで、筆者の説明の工夫がたくさん見つかった、という経験をたくさん味わえるようにしていきたいです。